

淫習シリーズ 01

瀬楠大学濫孔寮 第 109 代寮長

堂本轟木の忍従 上のサンプル

著者：金目

目次

登場人物紹介

第一話 瀬楠大学濫孔寮寮長継承式

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第二話 濫孔寮寮長就任初日

第三話 濫孔寮寮長の射精規則

第四話 濫孔寮男根選命を前にして

第五話 濫孔寮男根選命

第六話 轟木の醜極グロチン計測

第七話 フル勃起スプリングレーションベン

第八話 地獄の遅漏オナニー30分

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

登場人物

堂元轟木（どうもと ごうき）

男。瀬楠（せくす）大学四年生。第 109 代濫孔寮（らんこうりょう）寮長にしてボクシング部のエース。童貞。

通常時 8.8 センチ、勃起時 20.3 センチのずる剥けチンポ。

国木辰雄（くぬぎ たつお）

男。瀬楠大学濫孔寮第 108 寮長。ボクシング部の元部長にして、轟木に尊敬される男。

童貞卒業済み。

平常時・勃起時ともに 4.6 センチ（皮冠の厚み込み）の幼児向けクレヨンにも劣る貧弱ドリルおちんちん。

柳田鳩里（やなぎだ きゅうり）

男。瀬楠大学濫孔寮寮監。童貞卒業済み。

濫孔寮における最高責任者として、濫孔寮寮長の責務を監視する番人。

佐良 大平（さがら たへい）

男。大学四年生。濫孔寮寮生。陸上部部長。

轟木の高校時代からの親友でもある。

第一話 瀬楠大学濫孔寮寮長継承式

瀬楠大学は、この国において、いや、世界レベルで比較をした場合でも上位に入る名門私立大学である。

瀬楠大学の特異性を上げるのならば、推薦枠がないということだ。

瀬楠大学の学生にふさわしいのは、一芸に秀でているが、他の能力が劣っている学生ではなく、総合的に優秀な学生だという自負があるためだ。

瀬楠大学卒業者というだけで、一流企業、研究機関への就職がほぼ確実になるといえば、安定して優秀な学生を卒業させている実績が分かるというものだろう。

その瀬楠大学には、濫孔寮という寮がある。

ただの寮ではない。

名門私立大学である瀬楠大学の四年生から選抜された 49 名の男子学生しか入寮できない瀬楠大学のエリートの中のエリートのみが在籍できる寮なのだ。

濫孔寮寮生の選抜基準は非公開であり、濫孔寮寮生を選抜する濫孔寮管理運営委員会のメンバーは、瀬楠大学理事長による指名であること以外非公開である。

瀬楠大学には選抜された女子学生 49 名しか入寮できない名門寮である鈴鹿寮もあり、瀬楠大学の学生たちの目標の一つは男子学生ならば濫孔寮、女子学生ならば鈴鹿寮への入寮となるほどなのだ。

濫孔寮に絞って説明をするのならば、濫孔寮寮生には様々な特権が与えられる。

第一に、濫孔寮寮生は濫孔寮退寮処分を受けない限り、卒業時に入学金とすべての学費が返還される。

第二に、濫孔寮寮生は、寮生支援金として毎月 6 万円が無条件に支給され、この支援金には返済義務がない。

第三に、濫孔寮には専属の家政夫が 24 名所属しており、濫孔寮寮生の寮生活をサポートしてくれる。

第四に、濫孔寮寮生には専用の送迎車が 20 台配備されており、濫孔寮から瀬楠大学の校門まで送迎してくれる。

第五に、濫孔寮には寮生たちの健康面を見守るために、専属の医師、看護師、管理栄養士、カウンセラーが在籍している。

第六に、濫孔寮寮生は在寮中だけではなく、卒業後も瀬楠大学が保有する施設の優先使用権を与えられる。

そして、これらの特権の対価として、濫孔寮寮生は濫孔寮寮内の出来事についてのしゅ非義務が課せられる。

このように、濫孔寮に選抜されることは、守秘義務こそあれども、ただ単に名誉であるだけではなく、実利の面でも大きな利益を得られるため、瀬楠大学の男子学生たちは濫孔寮に選抜されるために、学業やスポーツ、研究活動や学生ボランティアに熱心になり、その結果、瀬楠大学の周辺住民だけではなく、様々な人々が瀬楠大学学生を好意的に見る結果とつながっている。

その瀬楠大学の寮長ともなれば、その特権は男子学生が受けるには過分ともいえるものになる。

濫孔寮寮生は二人で一部屋を使い、一部屋につき家政夫が 1 名配属されるのだが、濫孔寮寮長は一人で一部屋を使うことが許されている。それも、他の濫孔寮寮生の部屋よりも広い濫孔寮寮長専用部屋だ。

加えて、濫孔寮寮長には専属の家政夫が 3 名配属される。

そして、濫孔寮寮長は寮長慰労金として毎月 20 万円が無条件に支給されるうえ、退寮処分とならずに卒業できた場合には、濫孔寮寮長年金として死亡するまでの間毎月 20 万円が支給されるのだ。

さらに、濫孔寮寮長には寮長専用の送迎車と運転手も配属されており、瀬楠大学だけではなく、常識的な範囲内での送迎を行ってくれる。

まさに、世界的名門私立大学である瀬楠大学の選ばれたエリートである濫孔寮の輝かしい一番星である濫孔寮寮長にふさわしい特権である。

「お前が濫孔寮寮長に選ばれるなんて、ここ数年、ボクシング部は輝いているよな」

濫孔寮専用の送迎車の隣の席に座った大平に肩を叩かれ、轟木は重々しく頷いた。

大平は轟木の友人であり、濫孔寮に選抜された仲間でもある。

「ああ、濫孔寮寮長の責務の重さは重々理解しているよ。

今の寮長であり、ボクシング部部長を務めあげた国木先輩の後輩として、ボクシング部と濫孔寮の栄光ある歴史に泥を塗らないように、今から身が引き締まる思いだ」

轟木はぐっと握り拳を作った。

ボクシング部のエースであり、数々の大会で優勝という栄冠を獲得し続けている有名選手でもある轟木のまなざしは鋭く、そのストイックさは麓の住民たちに恐れを抱かせる霊峰のようでもある。

その厳格な佇まいは見る者に尊敬の念を抱かせるが、同時に近寄りたさも感じさせるものであった。

「おいおい、今からそんな気負ってどうするんだよ。

そんなにピリピリしてたら、一年持たないぞ」

一方、轟木に笑いかける大平は人当たりのよい好青年であり、爽やかな風がそよぐ平原のような雰囲気周囲に広げている。

轟木とは対照的な温厚さだ。

「いや、そんなに気負っていないさ」

轟木はにやりと笑った。

「高校時代からの親友である大平がいるから大丈夫だ。

まあ、俺が栄光ある濫孔寮寮長の責務に膝を折りそうになったら、遠慮なく頼らせてもらうよ」

「そっか、へへへ、濫孔寮寮生と寮長さまだと天と雲ぐらいの差があるけど、お前がそういうのなら親友冥利に尽きるってもんだよ」

大平のゆるっとした笑みを見ていると、轟木の心も柔和になる。

だが、轟木の緊張は完全には晴れない。

なぜなら、濫孔寮は寮生と濫孔寮のスタッフ以外の立ち入りが原則禁止となっている瀬楠大学の特権領域であるのだ。

今回は正式な入寮前の一時訪問、濫孔寮伝統の寮長継承式のために訪れるのだが、そのことは轟木の気分を軽くしたりはしない。

加えて、現在の濫孔寮寮長は轟木が尊敬する男であり、ボクシング部の部長である国木辰雄なのである。

国木辰雄は、轟木にとって特別な存在だ。

轟木が学生ボクシングを始める切っ掛けになったのも国木辰雄の試合を見たからである。

座学の成績が平均程度だった轟木が、他の大学からの推薦枠を断り、必死に受験勉強に励んで瀬楠大学に入学したのも、国木辰雄と同じ大学に通いたかったからである。

国木辰雄は身長 165cm とこの国の平均的な男性に比べると小柄であるが、それは彼が背

負う威厳を損なったりはしない。

その場にいるだけで、自然と気が引き締まり、周囲の人間を鼓舞する雰囲気具备了、指導者にふさわしい風格を備えつつある偉丈夫なのだ。

尊敬する男から、栄誉ある地位を継承する。

轟木のような生真面目な男にとっては最大の栄誉であり、最大の栄誉を背負う覚悟を求められることなのだ。

初めて向かう場所、そして、世界的名門大学である瀬楠大学の選抜されたエリートたちが暮らす濫孔寮の寮長に選ばれたという事実、その栄誉ある地位を尊敬する国木辰雄から継承するという事実、轟木にとっては生涯最大の誉と主張しても大袈裟ではないのだ。

「そういえばさ」

大平が今思いついたという様子で口を開く。

「どうしたんだ？」

轟木が問いかけると、大平が首を傾げた。

「濫孔寮寮生はさ、守秘義務があるじゃん」

「ああ」

大平の言葉に、轟木は頷いた。

「なんで、濫孔寮寮長には守秘義務がないんだろうな？」

大平の問いかけを、轟木は疑問に思わなかった。

「濫孔寮寮長も、濫孔寮寮生に含まれるから、じゃないか。」

「集合論だ」

「ああそっか、そうだよなあ。」

濫孔寮寮長だけが濫孔寮寮内のことを喋っていいわけないもんな」

轟木の指摘に、大平が笑った。

「もうすぐ濫孔寮到着か。」

「ドキドキしてきた」

「俺もだ」

轟木は満面の笑みを浮かべる大平に微笑を向け、頷いた。

轟木は、これから伝統と栄光ある濫孔寮寮長の座を、尊敬する男から受け継ぐのだ。

誇らしい反面、その重責への緊張を感じないわけがないのだ。

濫孔寮の談話室に案内された轟木はその豪華さに驚いた。

寮の談話室といえば、クッションのない椅子とテーブル、そして自動販売機とテレビに、寮生たちが無造作に置いていった雑多な本や雑誌が詰め込まれた本棚ぐらいなのだが、濫孔寮の談話室はそうした雑居のイメージとはかけ離れていた。

まず、椅子が違う。

濫孔寮の椅子は肘掛とクッション、サイドテーブルがついた豪華なものであり、選抜されたとはいえ、一介の男子学生が享受するには豪華なものなのだ。

加えて、自動販売機がない代わりに談話室の一角にバーカウンターが設置されており、専任のスタッフがノンアルコールや軽食を提供しているのだ。

テレビがさすがに一台なのだが、轟木がこれまで生活してきた寮とはディスプレイの大きさが違う。

談話室に置かれた本棚は、広い談話室の壁一面に広がっており、図書館に比べれば冊数は少ないものの、きちんと分類された本と学術専門誌、新聞が並べられている。

そして、轟木が驚いたことに、この談話室に置かれた椅子は100を越えているのだ。

濫孔寮寮生は瀬楠大学四年の男子学生から選抜された49名だけが在籍できる名門寮だ。濫孔寮所属スタッフの休憩所が談話室とは別に存在することを、轟木は談話室に案内されるまでの間に確認している。

ならば、この談話室を使うのは主に49名の濫孔寮寮生だけのはずである。

それなのに、一つ一つが高そうな椅子が100を越えて置かれている理由は、年に一度、濫孔寮寮生の数が倍の98名になるタイミングである濫孔寮寮長継承式のためだとしか考えられない。

談話室も、一つ一つがかさばる椅子をはじめとした豪華な設備が揃っているというのに窮屈さやせせこましさを感じさせない広々とした造りになっている。

濫孔寮が瀬楠大学の学生の頂点そのものであることは轟木も知っていたが、談話室一つをとってもその別格ぶりが明らかだ。

「おーい、轟木。

お前はほうじ茶だよな。ほれ、座って飲めよ」

轟木が談話室に圧倒されている間に、あっという間に馴染んだ様子の大平がお盆に乗せた湯呑とコーヒーカップ、それからクッキーを轟木に示す。

「ああ、ありがとうな」

大平の物怖じしない性格を頼もしく思いながら、轟木は大平の隣の椅子に座った。

大平が湯呑とクッキーが乗った小皿を差し出したので、轟木はそれを受け取り、サイドテーブルに置いた。

学生が使うものだということに、湯呑も小皿も、大平が持っていたお盆も名店の食器のように風格があるものであり、瀬楠大学が濫孔寮寮生を丁重に遇していることが伝わってくる。

「いやあ、これまで暮らしていた寮とは天と地ほどの違いだよな。

こんな贅沢ができるなんて幸せだなあ」

大平は嬉しそうに屈託なく笑っているが、轟木は無邪気に笑う気にはなれなかった。

濫孔寮の寮生でさえ、これほどの特権を享受できるのだ。

瀬楠大学が濫孔寮を丁重に遇するのは、無償の奉仕などではない。

この待遇にふさわしいあり方を求められているのだ。

ならば、濫孔寮寮長として選ばれた轟木は、どれほどの責務を背負い、果たさなければならぬのか。

それを思うと、轟木は積みあがっていく期待に怖気づいてしまう。

ボクシングの試合のように、明確に倒すべき相手がいることは楽なのだが、期待という定量的把握が困難なものの重みは、正直にいえば、轟木は苦手であった。

勝て、と言われるのは目的が明確だから楽なのだが、「愛されている実感が欲しい」というように心とか思いとか、形にできない要求を叶えることが、轟木には苦手であった。

瀬楠大学に入学して以来、女性との交際を三度経験したが、結局、「愛されている実感」

という轟木からの観測・確認が不可能な案件を提示されて振られてしまった。

大平に言わせれば、「そういう面倒な相手に好かれて災難だな」とのことで轟木には落ち度がないらしいのだが、大平の気配りの上手さを感じるたびに、轟木はもやもやとした思いを抱くのだ。

今は瀬楠大学に入学して以来の四度目の女性との交際中だが、今度こそ、きちんと交際を継続し、セックスにまでこぎつけたいと轟木は願っている。

「皆の者、注目！」

前触れもなしに響いた銅鑼のような宣言に、濫孔寮談話室の豪華さにくつろいでいた新四年生たちが静かになった。

轟木も益体もない物思いを止めて、宣言があった方向を見る。

談話室の入口には2メートル近い大柄で厳めしい顔の男性が立っていた。

海外プロレス団体のヒールだと紹介されればその通りだと信じてしまいそうなほどに、その全身から物々しい雰囲気を出している。

「私は、この濫孔寮の寮監に任命されている柳田鳩里だ。

これより、伝統と栄光ある濫孔寮寮長の継承式を執り行う」

柳田寮監の言葉に、轟木たち新四年生は居住まいを正した。

簡単な挨拶と確認だけという名目で呼ばれた轟木たちなのだが、それでも伝統と栄光ある濫孔寮寮長の継承式ともなれば自ずから背筋も伸びるというものだ。

「では、濫孔寮前寮生、入場！」

柳田寮監の号令とともに、談話室の入口から卒業を目前に控えた濫孔寮前寮生たちの入場が始まった。

卒業し、各々が栄誉ある舞台に羽ばたくことが決まっている濫孔寮前寮生たちは誰もかれもが自信と未来への希望に満ち溢れており、瀬楠大学の男子学生たちが想像する濫孔寮寮生像に合致した姿を見せつけている。

こんなにも自身と誇りに満ち満ちた濫孔寮寮生の代表である濫孔寮寮長を務めあげた国木先輩ならばどれほどまでに雄々しい姿を見せてくれるだろうか。

轟木は、国木辰雄を先輩として、男として尊敬するがゆえに、期待が高まっていく。

だから、談話室に入場する濫孔寮前寮生の最後に現れた国木辰雄の姿を見たとき、轟木は目を疑った。

他の濫孔寮寮生たちがきちんと服を着用し、自信と誇りに満ちた姿をしているのに対し、国木辰雄は全裸だったのだ。

それだけならば、体育会系特有の伝統だろうと轟木も思えただろう。

瀬楠大学陸上部部長は、その就任の際に部員全員とマネージャーたちの前で全裸でオナニーを披露するという伝統があり、さすがの大平も「あの伝統だけはしんどいんだよなあ」とため息をつくほどなのだ。

だから、濫孔寮寮長が全裸で現れても、それだけならば、轟木も濫孔寮の伝統なのだと安心できただろう。

けれど、国木辰雄の姿はただの全裸ではなかった。

国木辰雄の首から下の体毛がまったく見当たらないのだ。

国木辰雄はボクシング選手であり、当然、試合では上半身裸である。

だから、胸毛や腹毛、腋毛などのムダ毛を処理しているのは当然のことであり、轟木もムダ毛の処理をしている。

だが、国木辰雄の身体には、ムダ毛だけではなくチン毛もなかったのだ。

轟木は、ボクシング部のシャワールームで国木辰雄の全裸を見たことがある。

あれはまだ、国木辰雄が三年生、轟木が二年生の時だ。

シャワーの故障で水が噴射したことに驚いた国木辰雄が全裸でシャワーブースから飛び出したときのことだ。

あの時の国木辰雄の下腹部にはチン毛がもっさりとして生えていたし、冷水を浴びせられて縮まったチンポは轟木のチンポと同じぐらいの大きさであった。

だが、今の国木辰雄の下腹部はそのときから大きく状態が変わっている。

下腹部にはチン毛の代わりに、文字が入れ墨されている。

その文字を読んでしまったとき、轟木はおぞましさと恐ろしさに胃液が逆流しそうになった。

「第108代濫孔寮寮長 国木辰雄 粗チン 早漏 種なし 永世三冠王」

遠目からでもはっきり見えるほどの大きさで下腹部に刻まれた文字は、国木辰雄の男性性を徹底的に否定するものであった。

そして、粗チンという言葉にふさわしい惨めなものを、轟木は認識してしまった。

かつて見たときは、平均より大きな轟木と同等の大きさであった国木辰雄のチンポは、とてもではないがセックスのための器官である性器とは呼べない状態なのだ。

幼児向けのクレヨンよりも貧相なその姿はチンポではなく、おちんちんという呼称の方が正確であり、その先端は分厚い皮冠が突起として目立っている。

加えて、国木辰雄の玉袋は幼児のおちんちんよりも悲惨な姿になっていた。

玉袋が極めて小さく、男の生殖能力の源である睾丸が大豆一粒ほどの大きさになったとしか思えないほどの貧相さなのだ。

種なしという言葉が轟木の頭の中で反芻される。

あんなに小さな睾丸では、愛する女性と子を成すのに必要なだけの精液を生産できるとは思えなかったのだ。

子づくりという単語から、轟木は国木辰雄には交際中の女性がいたことを思い出す。

最後に国木辰雄の惚気を聞いたのは一年前、国木辰雄が濫孔寮寮長に選抜される前であり、既にその女性とのセックスも経験済みだという話で、轟木はあやかりたいと本気で思っていたのだ。

その国木辰雄のチンポが、セックスに用いる器官としてまったく役に立たない皮冠短小おちんちんになっている理由が、轟木には分からない。

せめて、何かの冗談であってほしいと轟木は国木辰雄の顔を見た。

そして、轟木は絶望した。

ボクシング部部長として堂々と部員たちを指導し、ボクシング選手としては快勝を重ね

てきた国木辰雄の顔には、未来への希望や、己への自信などまったくなかった。

ただその場に立っているだけで、周囲の人間を鼓舞する雰囲気は失われていたのだ。

いや、国木辰雄の顔は永遠の責め苦を背負わされた咎人の疲れ切った思いが溢れ出ていた。

ボクシング部長としての自信にあふれた国木辰雄は、空元気と見栄だけで積み上げられた虚飾であり、永遠の責め苦を背負わされた咎人の諦観こそが、国木辰雄の本当の顔なのだと轟木は実感させられてしまう。

轟木の中で新月の闇よりも深い恐怖が湧き上がる。

ここは瀬楠大学濫孔寮のはずだ。

世界的名門大学である瀬楠大学のエリートから選抜された49名が在籍する名門寮のはずだ。

その伝統と栄光に溢れた濫孔寮の寮長が、どうしてセックスの役に立ちそうにない貧相な皮冠短小おちんちんをぶら下げて、あんなに絶望し切った顔をしているのだろうか。

轟木は自分自身だけが悪夢を見ている可能性を見出そうと、周囲を見回した。

だが、大平や他の新四年生たちも驚き、絶句している様子を確認するだけだ。

新四年生たちの誰もが、濫孔寮前寮長である国木辰雄の惨めな姿を認識しているのだ。

だとするのなら、濫孔寮前寮生たちのあの自信と希望に満ち溢れた姿は何なのだろう。

濫孔寮前寮長である国木辰雄の惨めな姿に疑問を抱いていないのだろうか。

轟木が動揺し、現実への認識に臆している間に、濫孔寮前寮生たちが次々と談話室の椅子に着席する。

だが、濫孔寮前寮長である国木辰雄だけは起立したままだ。

「俺は、第108代濫孔寮寮長！ 国木辰雄であります！」

国木辰雄が堂々と声を張り上げて叫んだ。

だが、その表情、その下腹部に刻まれた文字、そして成人男性にふさわしくない皮冠短小おちんちんのせいで、その宣言は絶望の嘆きにしか聞こえなかった。

「俺は、第108代濫孔寮寮長として、伝統と栄光ある濫孔寮寮長の責務を全ういたしました！」

これほどの榮譽は、これから先の俺の人生にはないでしょう！」

国木辰雄の宣言は、言葉こそ立派なものであったが、国木辰雄の惨めな皮冠短小おちんちんの前では、あまりにも白々しい絵空事でしかなかった。

「ここに！ 濫孔寮寮長最後の務めとして！」

新たなる濫孔寮寮生！ そして、新たなる濫孔寮寮長に！

俺の射精を！ 披露させていただきます！」

国木辰雄の宣言に、轟木は二重の意味で驚いた。

まず、轟木が知る国木辰雄はオナニーを見せびらかすような露出癖を備えてはいなかったため、射精を披露するという言葉にギャップを感じたのだ。

そして、今の国木辰雄の下腹部にあるのは幼児向けのクレヨンよりも貧相な皮冠短小おちんちんに、大豆一粒ほどの小ささの睾丸が収まっているとしか思えない貧相な玉袋だ。

とてもではないが、ザーメンをぶっ放せるだけの性能があるとは思えないのだ。

国木辰雄の宣言に合わせるかのように、三人の男たちが談話室に入ってきた。

三人の胸には「濫孔寮寮長専属家政夫」と書かれた名札がつけられており、彼らがこの一年間、国木辰雄の身の回りの世話をしてきたのだろう。

濫孔寮寮長専属家政夫の一人が三角定規を取り出した。

「ではまず！ 勃起させていただきます！」

国木辰雄がそう宣言すると、乳首を摘みみだした。

轟木は知識としてチクニーの存在を知っている。

だが、轟木が尊敬する男であった国木辰雄とチクニーが結びつかない。

だから、轟木はどうしても目の前の哀れな男が国木辰雄だと認識できないのだ。

国木辰雄の股間の皮冠短小おちんちんがぐぐっと頭をもたげ始めた。

その様子を見た轟木は、もしかしたら、勃起すればチンポと呼ぶのにふさわしい姿になるのではないかと、祈るような思いで皮冠短小おちんちんの動きに注目する。

だが、国木辰雄の皮冠短小おちんちんはちょっと角度を上げただけだった。

たらんと垂れ下がった姿から水平まで上がるだけ。

健康な20代の男性の勃起角度とは思えない情けない勃起角度だ。

「勃起いたしました！ 濫孔寮寮長最後の皮冠短小おちんちん計測をお願いいたします！」

国木辰雄の宣言に、轟木は泣きそうになった。

国木辰雄の下腹部に備わったモノは、皮冠短小おちんちんでしかないのだが、かつては立派なチンポが備わっていた国木辰雄が、自分の口から「皮冠短小おちんちん」と宣言することで、その哀れさと惨めさが際立つのだ。

三角定規を持った家政夫が国木辰雄の皮冠短小おちんちんを掴んだ。

「それでは、正確な計測のために皮冠を開きます」

家政夫がそう告げると、国木辰雄の皮冠短小おちんちんの皮を引き下げようとする。

無理だろう、と轟木は直感した。

国木辰雄の皮冠短小おちんちんの皮はかなり多い。

普通の包茎チンポの皮冠を一段とするのならば、四から五段はありそうな皮冠なのだ。

あんなに皮が余っていては亀頭を露出させるほどに剥くのは無理だと感じたのだ。

家政夫がにやにや笑いながら国木辰雄の皮冠短小おちんちんの包皮を引き下げていく。

だが、雁首らしき部位に皮が溜まっても国木辰雄の亀頭は露出できない。

「いつも通りとはいえ、国木寮長の皮冠短小おちんちんは今日も皮が剥けませんね」

家政夫の宣告に、国木辰雄が泣きそうな顔をする。

当然だろう、と轟木は感じた。

生まれつきの皮冠短小おちんちんならば、まだ諦めがつく可能性があるが、国木辰雄は立派なチンポを備えた男だったのだ。

それが、こんな惨めな皮冠短小おちんちんになってしまい、その上、皮も剥けないと揶揄されて、屈辱を抱かないはずがないのだ。

「では、国木寮長の皮冠短小おちんちん計測は分厚く見苦しい包皮の長さも含めた計測となります」

家政夫がそう告げると、国木辰雄の皮冠短小おちんちんに三角定規を当てた。

「おやおやおやおや、まあまあまあ。

立派な成人男性のペニスだとは思えませんね！

セックスをしていると思えただろう。

だが、国木辰雄の股間についているのは、幼児向けのクレヨンよりも貧相な皮冠短小おちんちん、勃起して、分厚い皮冠を含めても5センチ未満の惨めな肉なのだ。

そんなものを腰と一緒に振り回して、どうしてエアセックスだと思えるだろうか。

かつての国木辰雄のチンポを知っており、国木辰雄を男として尊敬している轟木でさえ、今の国木辰雄の姿は無様そのものだと感じてしまう。

しばらくして、国木辰雄の動きが止まった。

「ひい……はあ……ひい……はあ……」

まるでフルマラソンを走り切ったかのように、呼吸を荒げ全身を震わせている国木辰雄の姿は、早漏と呼ぶにはあまりにも早すぎるチクニーの後だと思うと、滑稽なだけであった。

国木辰雄を男として尊敬している轟木でさえ、今の国木辰雄の姿に尊敬していた男としての姿を見出すことができない。

だが、国木辰雄が射精をしたとは轟木には思えなかった。

轟木が座る椅子から国木辰雄はほどほどにしか離れていない。

下腹部に刻まれた文字を読むことができる距離だというのに、国木辰雄の皮冠短小おちんちんからザーメンがぶっ放されたとは思えないのだ。

家政夫たちが国木辰雄の皮冠短小おちんちんの真下に掲げられた黒布を手を持ち、新四年生が座る側を練り歩き始めた。

轟木にはその意図が読めないが、黒布を目の前にした新四年生たちはぎょっとした顔をする。

そんな顔をするほどのことが黒布にあるようだが、轟木にはそれが何なのか分からない。

隣の椅子に座る大平も不安そうな顔をしている。

しばらくして、黒布を持った家政夫たちが轟木たちの前にやってきた。

チクニーをしていたらしい国木辰雄の皮冠短小おちんちんの真下に掲げられていた布は、一見すると普通の黒布にしか見えない。

「真ん中からやや手前を見てみなさい」

家政夫に指示を出され、轟木は言われたとおりの場所を見つめる。

「うそだろ……」

轟木は己の観察で見出したものが信じられなかった。

黒布の手前あたりにほんの一滴、僅かに薄いしみができている。

ほぼ透明な液体の中に僅かに白濁が混じった一滴は、黒布の上でなければ見つけ出すことは困難だっただろう。

現象は認識した。

けれど、轟木はそれを現実のこととして認めたくはなかった。

国木辰雄を尊敬する一人の男として、この現実を認めたくはなかったのだ。

けれど、轟木の冷徹な理性はこれを現実であると断じる。

現実であるのならば、国木辰雄があまりにも哀れで、無様で、男として再起不能であるというのに、轟木の冷徹な理性はこれを現実だと認識している。

あれほど大げさな様子でチクニーをしていた国木辰雄は、あんなに大げさに喘ぎ、腰を大きく振っていたのに、ほんの一滴しかザーメンをぶっ放せないのだ。

大豆一粒のように小さな睾丸を踏まえれば、頑張った結果なのかもしれないが、雄の生殖能力としてはないも同然だ。

いや、そもそも勃起して、皮冠の厚みを含めても5センチ未満の短小おちんちんでは挿入する側としてのセックスは不可能だ。

国木辰雄は下腹部に刻まれているように、種なしになってしまったのだ。

「……っ」

轟木は思わず己の口を手で塞いだ。

かつては恋人とセックスをしていると語っていた国木辰雄が随とされた惨めな境遇への同情もあった。

だが、それと同時に、轟木は自覚してしまった。

国木辰雄の惨めな姿は、濫孔寮の次期寮長である己の未来の姿なのだ、と。

競い合うエリートたちの代表として選ばれたという名誉とそれに伴う責任への不安は轟木の中から消え失せた。

その代わりに轟木が得たのは、濫孔寮の寮長という立場に付随する責務への恐怖であった。

轟木は隣の席に座る大平に手を握ってもらおうと思った。

だが、この談話室は広く造られており、隣の椅子に座った大平に向かって手を伸ばしても届かない。

どうしてこんなことに……

伝統と栄光ある濫孔寮の寮長の玉座が、石抱き責めの石畳のようにしか思えなくなった轟木は、逃げ出してしまうのか、と考えた。

轟木の心の半分ぐらいは今すぐにでも濫孔寮寮長の座を辞退するべきだと叫んでいる。

けれど、轟木の心の一部は、尊敬する男である国木辰雄が逃げずに耐え抜こうとしている濫孔寮寮長の座を投げ出していいものか、とためらっている。

轟木の心の残りは、轟木が濫孔寮寮長の座を拒んだことで、親友である大平が濫孔寮寮長に選ばれてしまうことが恐ろしい。

心が散り散りになった轟木は、決断をすることができずに豪華な椅子に座り続けることしかできない。

初めて見たときは、濫孔寮寮生たちは丁重に遇されているのだと感じた椅子も、今では石抱き責めの石畳と変わらない。

身体が一つであるがゆえに身体の中で心同士がぶつかり合う。

何一つとして決断できない轟木はおぞましい現実を見つめ続けるしかない。

家政夫たちが新四年生の間を練り歩き終え、国木辰雄の側に戻った。

「では、濫孔寮寮長として最後の務めですよ、国木くん。

そのどうしようもないカス汁のような真似をしないでくださいね」

柳田寮監の侮辱は、男としての国木辰雄にとって怒りどころか殺意を暴発させかねない侮辱だと、轟木は感じた。

けれど、国木辰雄はその侮辱に対して、表情を少しも変化させない。

この程度の侮辱は日常茶飯事なのか、侮辱に対して怒りを感じるだけの気力もないのか、どちらだとしても、濫孔寮寮長の座が地獄のようなものであると轟木は感じざるを得ない。

国木辰雄が両手を腰に当てて腹筋をぎゅっと引き締めた。

そして、大きく口を開けて宣言した。

「第108代濫孔寮寮長として、次代を担う濫孔寮寮長に告げる。

これは、濫孔寮寮長が代々受け継ぎ、守り抜いた、濫孔寮寮長の魂の責務である」

国木辰雄の声は堂々として張りがあり、轟木が尊敬する男の威厳を感じさせるものであった。

だからこそ、下腹部に刻まれた屈辱的な文字と幼児向けのクレヨンよりも貧相な皮冠短小おちんちんが今の国木辰雄の惨めさを際立たせている。

轟木は尊敬した男が、救いようもなく惨めな生き物に墮とされたことと、轟木もまた、国木辰雄と同じ濫孔寮寮長に選抜されたことで、胸に鉛を流し込まれたかのように重苦しい思いに囚われる。

国木辰雄が消える寸前のろうそくの炎のような、最後の男らしさを振り絞ったとしか思えない迫力で宣言し始める。

「濫孔寮寮長は、寮監の許可なく射精をしてはならない。

濫孔寮寮長の射精は、常に濫孔寮寮生5名以上に見守られなければならない。

濫孔寮寮長は、濫孔寮の敷地内では全裸で生活しなくてはならない。

濫孔寮寮長は、濫孔寮寮生にチン毛とケツ毛を剃ってもらわなくてはならない。

濫孔寮寮長は、寮の外において寮監が指定した衣服を着用しなくてはならない。

濫孔寮寮長は、平常時と勃起時のチンポについて、濫孔寮に記録を残さなくてはならない。

濫孔寮寮長は、5月5日に行われる濫孔寮男根選命において、己のチンポを捧げ、その運命に従わなくてはならない。

濫孔寮寮長は、6月中に寮監が指定するゲイ動画メーカーにおいてゲイ動画に出演しなくてはならない。

濫孔寮寮長のチンポは、7月7日以降性器・および猥褻物として扱ってはならない。

濫孔寮寮長は、8月1日より卒業までの間、チンポを扱ってはならない。

濫孔寮寮長は、9月16日の鎮田間島の鎮撫祭において蛙納を務めなければならない。

濫孔寮寮長は、11月に開催される文化祭において、その身体によって招待客を接待しなくてはならない。

濫孔寮寮長は、1月1日より卒業までの間、射精は屋外で行わなくてはならない。

濫孔寮寮長は、2月17日に下腹部の永久脱毛を行い、濫孔寮寮長の証を刻まなければならない。

濫孔寮寮長は、濫孔寮寮長継承式の際に、濫孔寮寮長としての生き様を見せなければならない。

濫孔寮寮長は、卒寮後も一年に一度、平常時と勃起時のチンポのサイズを濫孔寮で計測され、記録されなくてはならない。

濫孔寮寮長は、濫孔寮寮長の責務を破った際、寮監の教導に従い、伝統ある濫孔寮の責務を破った己の罪業を償わなくてはならない」

轟木は、国木辰雄が宣言した濫孔寮寮長の責務におぞましさを抱いた。

濫孔寮寮長の責務という名目での辱めがあまりにも多いというのがあるが、国木辰雄の宣言によって、轟木は気がついてしまった。

もともと、轟木と同じ程度の大きさのチンポを備えていた国木辰雄が、幼児向けのクレヨンよりも貧相な皮冠短小おちんちんになってしまったのは、5月5日に行われるという濫孔寮男根選命の結果なのだとすることに……

轟木がこのまま濫孔寮寮長を継承してしまえば、轟木は5月5日に己のチンポを惨めで無様な皮冠短小おちんちんにされてしまうのだ。

いずれ、愛する女性とのセックスをすることを夢見ている童貞の轟木にとって、それはあまりにも残酷で恐ろしい未来だ。

「では、濫孔寮寮長継承式の締めくくりとして、次代を担う新たな濫孔寮寮長の宣言を行ってもらおう」

己に突き付けられた未来のおぞましさに震える轟木を追い詰めるかのように、柳田寮監が轟木に濫孔寮寮長になることを受け入れることを求めてきた。

轟木はまだ、濫孔寮寮長という名の地獄の一年間を受け入れる覚悟ができていない。

尊敬する男である国木辰雄が忍従したのに、後輩である轟木が逃げ出していいのかという良心の呵責や、轟木が濫孔寮寮長の座から逃げ出すことで、高校時代からの親友である大平に濫孔寮寮長の座が周りはしないかという恐怖と、濫孔寮寮長としての末路をつきつける国木辰雄の惨めな姿への怯えとで、轟木の心はバラバラになりそうなままだ。

「まさか、尊敬する男が耐え抜いた忍従から逃げ出そうなどという卑劣で男の風上にも置けないことを思いはしないだろうな。

何しろ、堂元轟木は素晴らしい男なのだからな」

柳田寮監の言葉に、轟木は諦めざるを得なかった。

もしも轟木が、己のチンポかわいさに濫孔寮寮長の座から逃げ出せば、轟木は男を自負できなくなるのに加えて、尊敬する男である国木辰雄を裏切ることになると悟ったのだ。

轟木は立ち上がり、事前に通達されていた誓句を思い出す。

暗記していた時は、与えられる栄誉と責務に身が引き締まる思いだったというのに、今ではその誓句が、己への死刑執行宣言であることを強く認識させられる。

けれど、轟木は卑怯者にはなりたくなかった。

尊敬する男である国木辰雄を裏切る真似はできなかった。

だから、轟木は暗記した誓句を大声で宣言した。

「堂元轟木は第109代濫孔寮寮長として、敬愛する男の先達から受け継がせていただく濫孔寮寮長の責務を、全身全霊をもって執行することを、ここに、誓います！」

轟木の逃げ場はなくなった。

轟木は、濫孔寮寮長になるしかないのだ。

尊敬する男である国木辰雄を最底辺の惨めな生き物にまで貶めた濫孔寮寮長の座に座り、己の尊厳を投げ捨てるしかなくなったのだ。

奥付

『淫習シリーズ 01 瀬楠大学濫孔寮 第 109 代寮長 堂本轟木の忍従 上』のサンプル

初出：2023 年 11 月 28 日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep